

## 話題4 「絆（きずな）」を大切にする社会を！

～南米チリ鉱山の落盤事故を考える～

「テーゲー（成りゆきまかせ）」の精神で沖縄を飛び出し、南米へ渡って一ヶ月。鉱山の落盤事故でウチナーンチュ（沖縄県人）のニーサー（若者）が、地下深く、暗黒の世界を体験する羽目になった。青天の霹靂。真っ暗な、閉ざされた社会。頭の中は真っ白。過去の思い出が走馬燈のように駆けめぐる。とっさに出た一言、‘オッカー（お母さん）’。

母親のお腹の中にいた頃は、実に幸せな日々であった。酸素も栄養もそれなりに与えられた。一人の世界は平和そのもので、孤独感は全くなかった。母親との‘へその緒’の「絆」は確かなものがあった。

狭い子宮の中で、生命の危機にさらされたことが一度だけあった。親戚の知識人を自慢する叔父が、最近の医学の遺伝子診断なるものについて母親に入れ知恵した。優秀な遺伝子など持ち合わせていないが、いくつかの欠陥を自覚していた。この危機は、なんとか未熟な脳を横に振って乗り切った。しかし、知識人を気取る叔父は、母親に「人生・・・とは」と悲観論を説いていた。

仏様は「生老病死」と四苦八苦と説き、キリストは十字架上に釘付けにされている。日本では、先人が「重荷を背負って、遠き道を行くがごとし」と例えているとの事。広い、明るい世界にあこがれていた矢先、例えようのない不安にかられた。「天国と地獄」の話まで聞こえてきた。「もしかして今・現在が天国で、これから生まれ出ようとしている世界が地獄では・・・」等々と考えがまとまらない。誕生の日がやってきた。悩んでいる間に、予定日が2週間も延び、帝王切開となった。

初対面での両親には愛嬌をふりまいてと考えていたのが、地獄かもしれないという恐怖感から大声で泣きわめいてしまった。私の気持ちを察せず、両親は「元気な泣き声だと」褒め讃えた。

‘友情’の「絆」が味方し、公務員になった。しかし、そこには「主任」「班長」「係長」「補佐」「課長」「部長」等と先の見えない世界があった。惰性での、その日暮らし。昼食の弁当箱の包み紙の新聞の求人欄に、チリ鉱山の広告があった。「現在の給与の5倍を保証する。経験者優遇」と。「なんくる・・・ないさ（おのずと道は開ける）」と応募したのが事の始まり。南米の同僚は、素人の私にも実に親切であった。そこには、昔の沖縄の社会にあった‘お隣さん’の「絆」が存在していた。

就職1ヶ月目の落盤。同じ暗闇でも、母親の子宮の中では一人であったが、孤独ではなかった。今回は30数名。大勢の中での孤独感。もしかして、ここが・・・「地獄」では。弱肉強食。自然淘汰。優性遺伝の法則のみが残るのでは・・・。しかし、隊長は冷静に振る舞った。‘生きる’ための「絆」、そして「縁」を説いた。秩序は保たれた。人事は尽

くされた。そして隊長はつぶやいた。「なんくる・・・ないさ」と。

絶句。思わず後ずさり、石柱の陰に身を潜めた。俺の口からは決して出ない、この場面での「なんくる」。俺は、単なる沖縄のニーサー。もしかすると、隊長は南米チリへ移住した本物のウチナー2世では・・・。救出作業は成功。真っ白な大脳皮質も活動開始。「テゲー」と「なんくる」の間には、天と地ほどの差があった。まてよ。またしても南米チリからの求人広告。

「現在の収入の10倍を保証する。初心者大歓迎」とある。

(病院広報誌はいさい23号 2011年1月1日 )